

純潔と寛容(二)

本多弘之

honda hiroyuki

我執

人間には純粋なものを良いものとするところがある。忠実であるとか誠実であるとか、混じり気がないことを、善とするところがあ
る。事が自然界に関わる場合には、純粋な在り方というのは結晶体のようなものとなる。それは、たとえばダイヤモンドのように、希少価値のある美しいものが多い。逆に言うなら、普通に存在しているものは、種々なるも

のが混合したり重層したり、他のものと結合したりして存在しているのである。だから、滅多にはないような純粋で希少なものを、貴重な価値あるものとして、人間は大事にするのであろう。

ところが、事が人間の在り方に関わると、これがなかなか難しいことになる。人間が純粋であろうとするとは、人間の意識とか行動

の動機とかに関わることであつて、人間同士の関係とか生活の形とかの問題だからである。つまり、美意識とか倫理的な潔癖感とかについての純不純のこととなるからである。

これがなぜ難しいかと言うなら、現実には社会の中で純粋であろうとするなら、他との協調とか共同とかがしにくくなるからである。それだけではない。自己が持つ美意識や倫理

観を絶対善としようとするなら、それを共感できないものは、それを排除しようとし、極端な場合は敵対関係を作ってしまうであろう。

前号（本誌第四号）に、近代の闇と啓蒙ということで取り上げた問題は、このことであった。近代の啓蒙がもたらした自由というところが、人間の価値観や行動規範のみではなく、信仰についての自由をも開いてきた、ということ。すなわち啓蒙が、固定した宗教的な枠を超える方向へと、人間に自由と「寛容」を教えてきたということ、ブラジルのゴンサルヴェス開教使に指摘されたということであった。

確かに近・現代の市民社会に比して、近代以前の一般の人々の生活は、悲惨で労苦の多いものであったに相違ない。だから、言うまでもなく近代の工業技術がもたらした人間生活への寄与は、計り知れないのである。そして、近代都市の生活者の上に、自由や平等という方向への可能性が開かれ、ある程度豊かで快適な生活が与えられていることも事実である。そして、今後もその方向が求め続けられていくのであろう。

現代を生きる私たちの問題は、すでに科学技術や近代工業によって都市の文明社会が与えられ、種々の事柄（職業・住居・宗教等）について、かなりの程度の選びの可能性が確保されつつあるのだが、その状態から人生を

出発するについて、新たに解決の困難な人生の闇が存在しているということなのである。

それは、人間の理性がどれほど合理的で論理的な整合性をもった機構や構造を生み出し得たとしても、実はそれからこぼれ落ちる「人間の実存」、つまり個が個であって、たとえ同類であろうとも、他には決して還元できない「自己自身」を生きる存在であるし、その一回限りの自己が、悲しくも有限な存在（時間的にも能力的にも与えられた条件を取り替えられないのであるから）として、自己の存在の意味を判然と自覚したいと思っているからである。

人間存在として、他に寛容なことは確かに美德である。誰でも、自分が他から優しく受け容れられることが望ましいからである。ところが、自己の存在を支える「意味」に関係して寛容であることは、自己の存在の意味の崩壊の危機につながる。むしろ、自己の存在の意味において、意味領域を安定的に保持することで、自己の個としての独自の意味を確保できるものなのであろう。だから、純潔が人間にとって善なることとされてくるのだとと思う。

それでは、人間において「純潔と寛容」とは両立できないものなのであろうか。このテーマは、西欧の概念で言えば、「正義と愛」という言い古された課題なのかもしれない。

しかし、「ジャスティス(justice)」というような道徳的な規範のみでなく、広く人間に意味を与える価値（たとえば、民族とか歴史とか文化とか、なかでも信仰など）について、それによって自己の存在の意味が感知される場合に、それに純潔であろうとするというような問題を、今は考察したいのである。そして寛容とは、他なるものの前に自己の存亡がかかるときに、自己を変革して他を受容できるかということなのである。いわゆる、面従腹背というような処世術ではなく、他を自己存立の内容にまで骨肉化して、自己の意味を喪失することなく保持し得るのかということなのである。

簡潔に言うなら、自己存在が「我執」としてある限り、このテーマは絶対に乗り越えることのできない壁だと思おう。いな、「純潔」も「寛容」も、自己中心的関心に捕らわれている「凡夫」には、実は虚構でしかないのではないか。

しかし、世界が地球規模でお互いに交流し、情報が瞬時に全世界を駆けめぐる現代にとつて、これを突破できる方法を確認していかなければ、世界戦争と地球滅亡の悲劇を真に止める道を開くことはできないと思うのである。

（ほんだ ひろゆき・親鸞仏教センター所長）